

宗祖の悲歎を聽きて

名畑應順

本願の「信樂」に宗祖は「歡喜賀慶」の字訓を加へられ、願成就の文に「信心歡喜乃至一念」と説かれる。「一念」については、「斯れ信樂開發の時刻の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰す」と釋せられた。信心はまことに歡喜慶喜を内景とするものである。『教行信證』の三序

を通觀するに、何れにも宗祖は佛祖の經釋によつて、如來本願の教法に値遇したという慶喜を述べてゐられる。その慶喜がやがて知恩報徳の營みとなり、本書の撰集ともなつた譯である。

然るにその慶喜を語るに先立つては、毎に深刻な悲歎の述べられてあることを看過してはならない。即ち「總序」に於ては「噫、弘誓の強緣、多生にも値ひ巨く」と痛傷の聲を發して、難信を歎じ、「別序」にあつては、

「自性唯心に沈んで、淨土の眞證を貶し、定散の自心に迷つて、金剛の眞信に昏」き者を悲しみ、「後序」に至つては、承元の法難の悲痛な顛末を略敘し、しかもこの間にあつて、自身が師主の源空上人から蒙つた數々の恩遇を記して、「仍て悲喜の涙を抑へて、由來の縁を註す」と結ばれてゐる。

總序と後序の終にそれぞれ「慶ばしき哉」の歎辭が置かれてゐるのに對し、『信卷』の「眞の佛弟子」の釋の結文と、『化卷』の眞門釋の結語とに、各々「悲しき哉」の痛歎を表はされてゐるのは、特に注意すべきであらう。

また宗祖は正嘉元年に、時機に對する深い悲歎から起筆して、『正像末和讚』五十八首を製作されたが、更にその翌年の正嘉二年には、八十六歳の老齡を以つて「愚禿悲歎述懷」と稱する一群の和讚を作つてゐられる。現行の諸本にはすべてこれを『正像末和讚』に編入してあ

つて、いはば續編のやうな形になつてゐる。

高田の顯智師書寫の『正像末法和讚』には、正編の終に「已上正像末之三時彌陀如來和讚五十八首」と首數を結んで後、「愚禿述懷」といふ標章があり、第一首の「不了佛智のしるしには」の初句に「佛智疑惑罪過」と傍記し、以下二十二首を收めつて、「已上疑惑罪過二十二首云々」といふ結語が記してある。そしてまた改めて「愚禿悲歎述懷」と標して、「淨土眞宗に歸すれども」以下十一首を録し、最後に「已上三十三首愚禿悲歎述懷」と結ばれてゐる。蓮師の文明本では「不了佛智」以下のいはゆる疑惑罪過の和讚には、別に標章はなく、首數は顯智本より一首多く、二十三首となり、その結語も多少異なつてゐる。また「疑惑和讚」の次に「皇太子聖德奉讚」を挟んで、次に始めて「愚禿悲歎述懷」と標する和讚を十六首列ね、最後に「已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懷としたり云々」いふ結語が附してある。兩本の初稿、再治、清書等から生じた差異がそこに自ら現はれたものであらうが、少くとも、顯智本が原形に近いものであることは明らかである。この顯智本の疑惑罪過の和讚の最初の標章に、前述の如く「愚禿述懷」とあるのと、改めて「愚禿悲歎述懷」と題して

ある和讚の最後に兩和讚を通算し、通名を記して、「已上三十三首愚禿悲歎述懷」とあるのから考へれば、この二種の和讚は本來共に悲歎述懷であつて、一連のものとして差支あるまい。

以上の如く『教行信證』と『和讚』とに現はれた宗祖の悲歎をここに併せ窺つてみたい。

二

「信卷」の「眞の佛弟子」の釋は、この卷の初の標擧「至心信樂之願」に註記せられた「正定聚之機」を承け、願成就の文に「住不退轉」と説かれるものである。宗祖によれば、それは實に釋迦諸佛の弟子であり、金剛心の行人であつて、必ず大涅槃を超證すべきものと約束されてゐる。この人の獲べき利益として、上に既に現生十種の利益を擧げられてゐる。これを更に具體的な佛弟子といふ人について解明し、廣く經釋によつて證明しようとして、十八文の多きを引用せられた。そして「横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕に大般涅槃を超證す」る念佛の衆生を以て、「等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉に無上覺位を極むべ」き彌勒大士に同じとし、また「金剛心を獲る者は韋提と等しく喜、

悟、信の忍を獲得す」る者として、その徳益を絶讃せられた。しかも「眞」の佛弟子に對する「假」なるものとして、聖道の諸機と淨土の定散の諸機とを簡び、「偽」なるものとして、六十二見、九十五種と數へられる外道を簡んで、これらに對蹠する正定聚不退の機の眞實性を確かめてゐられる。

眞の佛弟子はかくの如く佛教徒としての理想の形態であり、念佛者にとつて無上の幸慶を示すものである。然るに宗祖はこの釋を了らんとして、深く自身の現實に省みて、悲傷なきを得なかつた。「誠に知りぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快まず、恥づべし、痛むべし」と。ここに前來述べられたところの讚仰から調子は忽ち一轉して、沈痛を極めた慚愧の言葉を發せられた。佛弟子たるの身分を示す「釋」の字さへも、ここには脱せられて、「愚禿鸞」と自名をのせてゐられる。これは本書の五箇處に出づる自名の中でも、他にその例が見られない。眞の佛弟子はいふまでもなく、假僞の弟子を以てさへ自ら居ることのできない哀切な慚愧が、釋の一字を脱せしめたと見るのは、穿ち過ぎであらうか。ただここに留意すべきは、愛

欲に沈み名利に迷ふ人間性そのものに對する深い悲歎を述べられてはあるが、定聚の數に入る身でありながらも、それを喜ばず、眞證の證に近づく身であつても、それを快しまないといはれる語意である。それは潜かに喜びながらも恥ぢ、仄かに快しみつつも傷むものであつて、大悲攝護の裡に、悲喜の交はり流れる心情が自ら表現されたものと視はれる。

「信卷」にはかかる峻嚴な自省に乗じて、「難治の機」を擧げ、長い「涅槃經」の文を引用せられる。そして本願の「唯除五逆誑誑正法」の文意を解明されることとなるのである。

「涅槃經」の文には、阿闍世王が逆害を興こして、苦惱に沈み、遂に佛に歸して發心するといふ因縁を詳しく説かれるのであるが、宗祖はもとよりこれを自身の上に讀取つてゐられるのである。

この阿闍世王の發心した一段に於て、ことさらに本經の文意を轉じて、王を指して「諸佛の弟子」と稱されるのは、眞の佛弟子釋の餘意を承けるものとして、特に注目し値する。

歎異鈔の第九條に見られる唯圓坊と宗祖との問答は、正しくこの眞の佛弟子釋の結語を具體的に語られるもの

として、ありがたく頂かれる。また疎かな喜びがそのまま大いなる喜びとなることは、『行巻』に龍樹の『十住毘婆沙論』を引用されるに當り「如_レ下_レ以_レ一_ノ毛_ヲ爲_ス三_ノ百分_ト以_レ二分_ノ毛_ヲ取_ル大海_ノ水_ヲ若_シ三_ノ滯_ヲ苦_ハ已_レ滅_ス如_シ大海_ノ水_ノ餘_ヲ未_レ滅_ス者_ハ如_シ三_ノ滯_ヲ心_ノ大_ノ歡_喜」と讀まるべき論文を、宗祖はわざわざ改點して「如_レ下_レ以_レ一_ノ毛_ヲ爲_ス百分_ト以_レ二分_ノ毛_ヲ取_ル大海_ノ水_ノ若_シ三_ノ滯_ヲ苦_ハ已_レ滅_ス如_シ大海_ノ水_ノ餘_ヲ未_レ滅_ス者_ハ如_シ三_ノ滯_ヲ心_ノ大_ノ歡_喜」と訓まれてゐるのに注意したい。前者の如く文法的に讀まれる論文は、菩薩の初歡喜地に於ける大歡喜の心境であり、それは念佛者に於ても、法の徳益としては當然肯けることであらう。宗祖も勿論この讀み方を拒まれる譯ではなく、引用された論文の後段には、その意を以て讀んでゐられる。併し現實の機相を省みれば、僅かに二三滯ほどの苦が滅したばかりの哀れさであらう。低下の凡愚にはこの二三滯の苦が除かれたといふことに、大歡喜ありとされるのである。

三

『化巻』に第二十願により「小經」の意を述べられる眞門の釋を結ぶに當つて「眞に知りぬ、專修にして雜心なる者は、大慶喜心を獲ず」と、これが機の失を擧げら

れる。そこには續いて大慶喜に對蹠するいはば大悲哀を語られる。專修にして雜心なる者は、その修行する法として、一向專修の念佛であつても、その行ずる心は定散心の雜はる者であつて、「助正間雜の心を以て名號を稱念す」といひ、或は「行は專にして心は間雜す」ともいはれるものである。この行人は大慶喜心を獲ないものとされる。大慶喜心は「信巻」の初に「極惡深重の衆生、大慶喜心得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」と説かれたものと對應し、眞門の機は名號を稱念しながらも、この大慶喜心を獲られないといふことが根源的な悲哀であつて、その實踐面に現はれる過失として、宗師善導の『往生禮讚』によつて、四失を擧げてある。

(1) 佛恩を念報することがない。これは雜心の失の最も代表的なものであり、慶喜の心を缺く顯著な實證である。「一心をえざる人なれば、佛恩報ずるところなし」と詠ぜられ、「信心の智慧にりてこそ、佛恩報ずる身とはなれ」と歌はれるのであるから、信の眼の開けない限り、報恩の念のあらう筈はない。

(2) 三業に善行を修しても、既に報謝の念がないから、自己の善を恃んで、輕慢の心を生ずる。そして外面に賢善の相を現はして、福德を求め、名利に耽ることと

なる。

(3) 我獨り賢しといふ傲慢の心があるから、同行善知識に親近しない。

(4) 善知識に親近しないといふ反面には、同氣相求めて、種々の雜縁に近づくことを好み、自身の往生の正行を障へるばかりでなく、他の行をも妨げることになる。

この四失は『禮讚』に雜修の十三失を擧げてある中で、第十失以下の四失に據られたものであるが、『禮讚』では第九失に「慚愧懺悔の心有ることなきが故に」といひ、罪障の懺悔がないといふことから、以上の如き四失も導き出されたやうである。四失はまた相連關して展開するものであり、凡そ雜心なる者に續起する弊害を嚴しく剔出されたものである。ここに於て宗祖は專修雜心を深く悲しんで、「悲しき哉、垢障の凡愚、無際より已來、助正間雜し、定散心雜するが故に、出離其の期なし。自ら流轉輪回を度るに、微塵劫を超過すれども、佛願力に歸し巨く、大信海に入り巨し。良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし」と盡くることなき悲歎を發せられた。まことに煩惱具足の凡愚の身を以てして、無始以來自力疑心を離れないために、出離の期とはなかつたのであるが、この過去の經歷に徴すれば、未來際を盡くすま

で、やはり自力疑心に滞つて、願力に歸し難く、信海に入り難い、と痛切に傷嗟悲歎されるのである。

『信卷』の眞の佛弟子の結釋には、深く自身の愛欲名利の煩惱を悲しんではゐられるが、そこにはなほ窳かな喜びが伴なつてゐた。併しここに至つては、垢障の凡愚を荷負して、自力疑心による果てしない流轉を悲しまれるのであり、その悲歎はいよいよ哀切を極めるやうである。

かくの如く心が雜心であれば、たとひ行は專修念佛であつても、自力の計執を免れないものであるから、宗祖は更にその過失を追究せずにはゐられなかつた。それはすべての聖者や善人たちが、名號が本願力の廻向であり、行者に於ては不廻向の行であるにも拘らず、これを稱念すれば功德利益があるとして、自己の善根に取りなすところに、信を生ずることのできない譯がある。即ちそれは佛智の不思議をさとらないのであり、佛智不思議を以て成就せられる報土の眞因を了知することができないから、報土に入ることがないものとされる。

いはゆる助正間雜の心を以て名號を稱へる自力念佛の問題になれば、そこに凡聖善惡の差別はない譯であるが、前には特に凡愚について、その自力心の故に無窮に

流轉することを悲歎し、ここには聖者や善人について、本願の名號を信受しないために報土に生ぜずとして、化土に生れることを暗示して誡められた。まことに祖釋の行文に妙味の存するところである。謂ふに垢障の凡愚が身のほどをも知らず、自力心に滯るといふ面を重視すれば、長く出離の期とはない流轉輪廻が豫感せられ、聖者や善人が己が善根として名號を稱念するといふ邊を強調すれば、化土に生まれて空しく過すといふ結果が豫想されるであらう。尤も自力の念佛といふものは、凡夫よりも聖者に於て、悪人よりも善人にとつて、一しほ問題になるといふことも考へられるであらう。また宗祖に於ては、聖道並びに淨土の他流の諸師の念佛義に對して、嚴正な批判を加へられる意もあつて、特に聖者善人に託して化土の往生を誡められたといふことも察せられる。それは極惡深重の衆生が大慶喜心を獲るものと正に相對照せられる。何れにしても上に示された大慶喜心を獲ない者について擧げられる四種の過失は、流轉の悲哀を招くものとしても、化土の苦厄を感じるものとしても、行人に於て齊しく深く反省さるべきものであらう。そしてかかる機類のために、如來が第十八願から更に第十九、第二十の願を開いて、方便施設せられた大悲を仰がずに

ゐられないであらう。

ここに至つて、宗祖は論主の解義と宗師の釋義によつて假門から眞門へ、眞門から弘願へと轉入された、いはゆる三願轉入の次第を語り、果遂の誓の空しからぬことを讃仰し、佛恩を報謝するために、本書を撰集するに至つた喜びを述べられることとなるのである。

四

『正像末和讃』には、末法五濁の時期ともなれば、疑謗の輩が多くなり、念佛を誘ふことによつて、生死流轉の苦を招くことを悲しまれた和讃が多い(八、一二、一三、四〇、四一等)。それは恐らく當時の世相に於て、宗祖の實感に切なるものがあつたことであらう。疑謗は疑惑と誹謗であるが、この和讃の正編に於ては、寧ろあらあらしい誹謗破法の罪が述べてあるのに對し、「悲歎述懷」の一部たる二十餘首には、誹謗よりも更に内面的であり、根源的とも考へられる疑惑の罪を悲歎してゐられる。

「惠信尼文書」によれば、宗祖は曾て建保二、三年、四十二、三歳の頃、佐貫の地に於て、衆生利益のために三部經を千部讀始めてゐられたが、念佛の信心の外に自

信教人信の道のないことを思ひ返して、讀經を中止されたことがある。ところが寛喜三年四月、五十九歳で病臥せられた時、夢幻の間に大經を讀續けたことを、心得ぬこととして、深く反省し、「人の執心自力の心はよくよく思慮あるべし」と思いなされたといふ。然るに今や宗祖は圓熟された八十六歳の老齡に及んで、なほかつこの疑惑罪過の和讃を造つて、古人がその分科に困惑したほどに、繰返し繰返し自力疑心を誡められたのである。これによつても終始自力疑心といふものに、いかに嚴しい反省と批判を加へてゐられたかといふことが察せられる。

この和讃は願智本第一首の初句の傍記と結勸の言葉に明らかな如く、佛智不思議を疑惑する罪過を悲歎せられる。それは前述の『化卷』の眞門釋の結文に見られる悲歎を、更に聖語(主として大經)を借りて、種々に歌ひ續けられるものである。凡そ佛智不思議といふ言葉は、宗祖老後の著述や法語にしばしば見られ、『淨土和讃』の大經和讃にも用ひられてゐるが、特に『正像末和讃』に至つて頻發される。末讚では本願についても「智願」といはれ、これが信心に「信心の智慧」、念佛に「智慧の念佛」と稱せられるのが目立つ。何れにしても凡夫の

はからひを離れ、如來の智慧を仰ぐところに、「他力不思議」、「佛智不思議」と讚えられるいはれがある。この不思議はあながち人間の思議を拒むものではなく、思議の限界を知り、思議を超えしめるものである。それは却つて人間の愚を自覺せしめるものともいへよう。

佛智を疑惑する者は反面に罪福信を懐くものである。即ち善惡因果の道理といふ一般の佛教常識を持つものである。随つてその信自體に過誤があるといふ筈はなく、一應は善きこととして認められる。「疑心の善人」といはれ、「自力諸善のひと」といはれる所以である。然るにかかる常識に拘はつて、それを超えた佛智を疑ふところに罪過がある。罪福の罪を知りながら、佛智疑惑の罪を知らないといふ悲哀がある。まことに意識しない罪ともいふべきであり、微細に見られて、却つて深い罪として、永劫流轉の因となる。幸に諸善を修し、自力の稱念を勵んでも、化土に留まることを歎かれるわけである。

凡そ信は疑のなき心といはれ、眞實の信心と佛智の疑惑とは正に相反する。眞實の信心は機法二種の深信に開かれ、罪惡生死の凡夫として、疑なく慮なく、彼の願力に乗ずるものであり、謙敬の心に住するものである。自力疑心はこれに反して、自身の罪障に關して遲疑し、往

生の業因について疑惑するものであつて、自身の分限を知らないで、佛智を凡慮と同じ次元に於て計らうものであるから、却つて傲慢となり、貢高することとなつて、謙虚と敬虔とを缺くものといはれよう。

疑惑の罪過によつて招かれるものは化土の往生である。化土については、この和讃に方便化土、邊地、邊地懈慢、懈慢邊地、疑城胎宮、胎生等の種々の名目が擧げられてをり、その意義や同異については、古來色々に論議が重ねられて來た。ここにはそれを詳述する邊がないが、これらの化土には、「むまる」といはれる場合もあるけれども、多く「とまる」「とどまる」と述べられる。即ちそこは停滞する境域であつて、行きつかぬ場處であり、隨つて還るといふこともあり得ない。大涅槃に至らず、還相の利益もない、いはば淨土教に於ける二乘地に墮するものに外ならない。さればその過失として擧げられるものは、㊶報佛恩の心がなく、㊷三寶を見聞しない。㊸大慈悲を得ない。㊹智慧がない。㊺空しく年歳を過す。㊻諸の苦厄を受ける等の諸難が數えられる。これらの諸難はもとより相連繫してをり、悲智雙行し、自利利他圓滿する大乘の菩薩道に缺けるものといはねばならない。

『化卷』に大慶喜心を獲ないものについて擧げられた四失は、この「疑惑和讃」に於て歌はれる自力疑心の因果と對考して、その意を得べきであらう。

化土の過難は種々の譬喩を以て語られる。即ち「金鎖をもちてつなぐ」、「七寶の獄にいましむ」、「七寶の宮殿にむまる」、「舍華未出」等といはれるものであり、何れも美しきもの、貴きものであつて、しかもそれにつながれ、いれられ、いましめられて、自由を得ない相として説かれてゐる。善本徳本や自力諸善に執して、廣大の佛智に歸入し得ないものの受くべき災厄として、いかにも適切な譬喩と思はれる。

顯智本の第二十首、文明本の第二十三首はこの「疑惑和讃」の結勸として、宗祖の本意の窺はれる重要な一首である。即ち上來の各首に示された疑惑の罪咎を總括して、「佛智うたがふつみふかし」といひ、疑心の罪の深さを思ひ知るならば、深く自ら悔責して、佛智の不思議をたのめと勸められる。「疑惑和讃」を作られた本意はそこにあるに違ひない。

凡そ「疑惑和讃」には誠門に立つた讃が大多數を占めるのは當然であるが、この結勸の一首の外に、顯智本の第二十一首、文明本の第七首には「信心のひとにおとら

じと云々」と稱名を勧められるがあつて、これも勸門に屬し、一見して自力念佛を勧められるやうであり、古人がその解釋に苦しんでゐる。そして自力念佛を勧めることによつて、自然に眞如の門たる第十八願に轉入せしめる意であるといふ。併し宗祖の法語に「佛恩のふかき

ことは憍慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかいのなかに、第十九、第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。佛恩のふかきことそのきはなし。」(末燈鈔第二章)といはれるやうに、化土に往生するといふことも、如來の大悲方便であり、方便までも煩はず大悲の佛恩を知るところに、やがて轉入がある。他力信心の行者が攝取の光益によつて、念々に稱名相續するのに、まさるとも劣らない如來の大悲が灑がれるのが、罪深い疑心の行者である。その大悲の恩を知つて、稱名せよと勧められるものと解すべきではなからうか。顯智本にこの一首が第二十首の「くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし」の次に加へられたといふことでも、その意が察せられる。再治清書本と推定される文明本では、この一首を第六首の自力稱名との連關から考へて、次の第七首に收められたものであらう。

まことに「疑惑和讚」は疑惑の罪過を深く悲しむことによつて、却つて哀々たる大悲の深重なることを感ぜしめるものである。

五

正しく「愚禿悲歎述懷」と標せられる和讚は、顯智本では十一首、文明本では十六首を數へる。文明本に多い後の五首は、再治に當つて附加されたものと考へられる。兩本共通の十一首を對照すると、若干字句の差異があるが、順序は同じく、讚意にも變化はない。ただ顯智本の第七首初句の右側に「愚禿悲歎の述懷」と記されてあるのが注意される。十一首の中で初の六首と第七首以下の後の五首とは、その内容に於て、明瞭に區分されるものがあり、古人もみなここで科を分つてゐる。その内容の區分からか、或は製作年時の前後からかによつて、この傍記が加へられたものであらう。

初の六首の中でも、前の三首と後の三首とは自ら所明を異にし、前者は清淨眞實の心なく、内外相應せぬ、虚假雜毒の人間性を深く剔り出して、これを悲しみ、後者は十方に滿つる御名の功德を讚へ、苦海を渡る願船を憑み、他力廻向の佛徳をひたすら仰ぎて、潜かに慶びを示

してゐられる。虚假邪惡の人間性を剔出されるところは、善導の三心釋の言葉を用ひられてをり、『信卷』の三心釋と相通するものがあり、眞の佛弟子釋の結語と照應するものがある。宗祖の内省もここに悲痛を極め、八十六歳の老聖人の言辭とは思はれないやうな嚴しさを以て人に迫るものがあり、悽愴の感を覺えしめる。然るに讚文は忽ち一轉して、無慚無愧の身を省みつつも、十方に滿つる御名の徳を仰ぎ、小慈小悲もなき身を悲しんで、切に希念せられる有情利益を斷念することにより、自身の出離得脱に歸つてゐられる。そこに自利と利他とが自ら他力によつて成就することが、一見して前後承接しないやうな用語の上に表明されてゐる『正像末和讃』の正編に歌はれた、願作佛心と度衆生とを以て構造とする淨土の大菩提心を、近く傷むべき現實の人間生活に味はひ取られたものといふべきであらう。かくて自力修善の成じ難い蛇蝎奸詐の心、無慚無愧の身は、如來の廻向による外に救いのないことを決擇されるのである。

第七首以下の五首は、末法濁世に於ける道俗が外儀は佛敎の相であつても、内心は全く外道化してゐることを悲歎せられる。「かなしきかなや」を繰返し、「この世」、「このごろ」と指稱してゐられるところに、その時

代に對する悲歎の實感がよく現はれてゐる。即ち當時一般の佛敎徒が業報を顧みず、生死得脱の道を忘れて、現世の吉凶禍福にのみ拘はれ、良時吉日をえらび、天神地祇その他の鬼神を崇め、卜占祭祀を事とするやうな迷信に耽ることとなつたために、三寶の一なる僧とか法師とかいふ尊い名はあつても、袈裟に威儀を正してゐても、その實は外道に異ならないものとして歎かれる。この五首の讚意は『化卷』の末卷に「眞偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡」されるものに相當する。

願智本には缺けてゐる、文明本の第十二首以下の五首は、「五濁邪惡のしるしには」と書出され、前段の「五濁増のしるしには」の初句と相應じて、何れも五濁惡時の徵驗であることは同じであるが、その悲歎の内容は前段とはまた異なつてゐる。即ち前段の五首は佛敎の外道化を悲しまれたのに對し、ここでは世人が佛法を輕侮するやうになつたことを歎かれる。殊に僧或は法師といふ名の頽れたことを悲まれるのを注意すべきである。前の五首は名と實との相應しない悲しみであつたが、その名になほ佛法の命脈が辛くも保たれるといふことがある。持戒の僧もなく、破戒の僧さへない末法ともなれば、無戒名字の比丘でも、世の寶として尊敬されなければなら

ないのに、僧徒や法師の名が婢僕を呼ぶ名として用ひられるほどに賤しめられることになつたといふことは、宗祖にとつては何としても、これを悲しまずにゐられなかつたのである。そこには孔子が「必ずや名を正さんか」と叫んだ概さへも感じられることである。思へば最後に残るものは名のみであり、名にこもる意味の深さを汲み取るところに、末世の佛徒の道があるのではあるまいか。

この五首の讃意は『化卷』の本巻に「穢惡濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。今時の道俗、己が分を思量せよ」と警告して、如來般涅槃の時代を勸決し、元仁元年に至るまでの年時を數え、己に末法に入つて六百八(實は七)十三歳であるというて、最澄の「末法燈明記」を引用されるのに符合する。

第十四首に「罪業もとよりかたちなし云々」の一首が加へられてあるのは解し難い。前後の讃に述べられてあるやうな末法濁世の顛倒や罪業が、本來清淨の心性に背いて起るといふ意に解せられぬこともないが、それでは少し迂遠の感がある。高田の眞蹟本と稱せられる「正像末法和讃」(別筆を含む、三十五首)の末尾に附された和讃に「罪業もとより所有なし、妄想顛倒よりおこる。心

性みなもとときよければ、衆生すなわち佛なり」といふ一首があつて、考へさせられる問題を含んでゐる。これは文明本の第十四首と後の二句が全く變つてゐるが、少くとも文明本所収の方は「この世はまことのひとぞなき」と歌はれて、悲歎述懐の一首としては適はしいやうである。「己上十六首、これは愚禿がかなしみなげきにして、述懐としたり。この世の本寺本山の僧とまふすも、法師とまふすも、うきことなり」といふ結文には、いかにも宗祖のしみじみとした感慨が溢れ、温かい涙が滲んでゐる。上の如く時機の劣惡と濁世の弊風とを省みて、いたく悲歎せられたが、それはもとより感情に走つた誹誘ではなく、また冷酷な批判でもない。大悲を體した深い慈愛から湧出る痛傷の外の何ものでもない。愚禿が悲しみはそのまま流れて、南都北嶺の本寺本山の殊勝なる僧分の憂き艱難に對する理解となり、同情となつたのである。個人の悲しみがそのまま全人の悲しみとなり、一世の歎きがやがて一身の歎きとして感ぜられたともいふべきであらうか。

この小文はもと昭和三十三年度尾張國講習會の講本の一部に備へられたものである。